

ものの正しい使い方教育 －靴教育の視点から－

片瀬 眞由美（金城学院大学生生活環境学部）

Education in Ways of Correctly Using Things - from the Viewpoint of Shoe Education -

Mayumi KATASE (Kinjo Gakuin University)

1. はじめに

日本人間工学会のホームページには、人間工学の目的が次のように書かれている。「人にやさしい技術、使いやすい機器、生活しやすい環境をつくるために生まれ、人間の能力にふさわしい用具・技術・環境の条件を知って、自然なかたちで実生活がおくれるようにする」。このように、人間工学は、その成果が社会に認識され、受け入れられ、役立てられているといえよう。

しかし、視点を変えれば、人間工学は主にもものづくりの方法や、出来上がった製品の評価の面で研究がすすめられ、製品が消費者のもとで正しく使われ、その機能を発揮しているかという検証までは行われていない場合が多いのではないかと。つまり、誤った使い方、その製品の機能性が十分に発揮されない恐れもある。その一例が子ども靴である。「靴教育」とは耳慣れない言葉だと感じる向きも多いだろう。日本人と靴に関する研究を重ねるうちに、必要に迫られて筆者が作った「造語」である。筆者が行っている「靴教育」の取り組みについて述べる。

2. 日本の子ども靴選びの現状

日本人の多くは、靴を脱ぎ履きする際に、ひもやベルクロなどの留め具を操作することを面倒がる。手を使わずに足だけで脱ぎ履きする者が圧倒的に多い。中には、決してほどけないように固く靴ひもを結び、ひも穴に横に通した靴ひもの間に蝶結びの部分丁寧にしまいこんでスリッポンの状態にし、つま先をトントンして靴を履いている男性も見かけるほどである。本来、靴ひもは足に靴をしっかりと固定し、歩行しやすくする目的でつけられている留め具である。しかし、日本人

はなぜか、留め具にはできれば触りたくない、足だけで脱ぎ履きしたいと思う民族のようである。

このような背景のもと、筆者らは子供靴選択時の意識と機能性に関する認識について、「靴の国」といわれるドイツと、我が国の消費者および教育者を対象に調査を実施した¹⁾。日本の保護者は、幼児靴の選択基準として、脱ぎ履きが速くできることを挙げており、留め具のない靴、手を使わずに簡単に履ける靴を支持していた。また、サイズに関しても、「すぐに靴が小さくなるのもったいない」と大きめサイズの靴を選び、1足あたりにかける金額も「すぐに小さくなり傷んでしまう消耗品である子ども靴には、なるべくお金をかけたくない」という結果が得られた。しかし一方、自由記述欄の回答からは「子どもには良い靴を与えたいが、良い靴が身近な店で売っていない。売っていても高く買えない。」という意見や、「良い靴選びの情報がないため、どのような基準で選んだらよいかわからない。」という意見が多くみられた。また、日本の保育士も、脱ぎ履きが速くできる靴を支持していた。一方、ドイツの小学校保護者を対象にした調査からは、足と靴をしっかりと固定させて履くことが大切であるという認識のもと、家庭で正しい履き方教育が実践されており、紐靴が最も良い靴であるとの回答が多かった。また、子どもも保護者もともに、足のトラブル症状は非常に少なかった。

このように、日本人の靴に対する意識は、良いものを求めてはいるが、何が良くて何が悪いかの情報が得られないために判断がつかず、強い不満を抱えながら靴選びをしていることが推察された。

3. 子ども靴のおちいるジレンマ

良い靴が売っていないのなら、靴メーカーに手

ごろな価格で品質の良い靴を製造販売してもらえれば良いのだが、そう簡単にはいかない。メーカー側としても品質の良い靴を作りたいが、質を高めればそれだけコストがかかるので価格はおのずと高くなってしまふ。これまで安い子ども靴に慣れてしまっている日本では敬遠されて売れない。この矛盾を解くには、たくさん売れることが必要で、そうなれば自然と価格も下げられるはずなのだが、子ども靴の機能性に目を向け、少し高くても買おうという保護者がまだまだ多くはないのが現状だ。つまり、品質の良い靴がたくさんは売れない現状では、靴の価格は下げられないのである。

4. 靴教育の意義と効果

情報がない、すぐに小さくなるからもったいない、消耗品にお金をかけたくない。これらの保護者の不満を解決するにはどうしたらよいか。また、主人公である子どもたちが健康な足に育つには何が必要か、検討を行い、たどり着いたのが靴教育である。

つまり、買う側・使う側が正しい知識を持ち、適切な靴選びを行えば、子どもの足が守られ、多くの購買者が品質の良い靴を選べば、子ども靴の価格も自然と下がって購入しやすくなる。また、筆者の共同研究者である整形外科医の塩之谷は、日本でも数少ない「靴外来」を開いている。そこに来院する子どもの患者に、誤った靴選びや履き方によって起こる怪我や、足の障害が多く見受けられると報告している²⁾。

せっかく機能性を考えて作られた子ども靴が数多く履かれるようになって、誤った使い方で足を痛めてしまうのでは本末転倒である。そのことを加味すれば、靴教育には、正しい履き方と、足に合ったサイズの靴選びの知識も必要になる。

つまり、靴教育の対象を以下の三者と定め、それぞれの役割に合った靴教育の方針を定め、現在試験的な実践を試みている。

【子ども自身への靴教育】

子どもは保護者に与えられた靴を正しい方法で履くことで、靴の機能性を十分生かした歩行を獲得し、足の健康を守る技を身につける。

【保護者に向けた靴教育】

保護者は、子どもの靴を選び与える立場である。つまり、機能性を満たし品質の良い靴を選択し、かつ足のサイズに合った靴を購入し、子どもに与

える。また、正しい履き方についても知識を持ち、家庭での履き方の定着教育に努める。

【教育者に向けた靴教育】

教育者とは保育士・幼稚園教諭・小中高の教諭を指す。これらの教育者は、品質の良い靴選びの知識、正しいサイズ選びの知識、正しい履き方のすべての知識を総合的に持ち、教育の場では子ども達に正しい履き方を指導・実践させ、保護者への啓発活動を担う。

5. まとめ

以上のように、人間工学の新たな役割として、作られた製品を正しく使う方法を教える「靴教育」に着目して、活動を展開している。実際に、幼稚園や保育園、小学校や中等教育学校などで、子ども自身への靴教育として、紙芝居や靴教育絵本などのツールを使った啓発、中高生には靴の授業、また、保護者向け講演会や教職員向けの研修を実践しているが、子ども達には一度教えるだけで正しい履き方は理解され、定着させることができている。また、保護者は、「今までこのような情報を待っていた」「子どもの足の健康を再認識し、靴選びや正しい履き方を今後は家庭で実践したい」という意欲を示している。教職員は、「その後の保育や教育の場面ですぐに生かすことができる、子どもの足の健康を守る知識が得られてうれしい」と感想を寄せている。

この活動が「ものの正しい使い方教育」の一例として、人間工学の意義と効果を社会に広め、日本の将来を担う子どもたちの足の健康を守るきっかけとなることを切に願っている。

引用文献

- 1) 片瀬眞由美他:「子供靴選択時の意識と機能性に関する認識—日本とドイツの消費者および教育者の比較—」, 平成15年度~平成16年度科学研究費補助金 研究成果報告書, 2003.
- 2) 塩之谷香他:「不適切な靴が原因と考えられる成長期の下肢障害」, 靴の医学, 22 (2) , 83-88, 2008.